

「ICTを活用した公正で質の高い教育の実現 (フェイズ2シンポジウム報告書)」の概要について

1. プロジェクトの目的と報告書の概要

本報告書は、国立教育政策研究所令和2年度教育改革国際シンポジウム「ICTを活用した公正で質の高い教育の実現」の講演録と関連資料をまとめたものである。本シンポジウムは、国立教育政策研究所が実施している「高度情報技術の進展に応じた教育革新に関する研究」プロジェクト（令和元～4年度）のフェイズ2の報告を兼ねている。

本プロジェクトは、進展する高度情報技術を学校教育に積極的に取り入れることによって教育革新を推進するための知見を提供することを目的としている。教育の質とともに、新型コロナウイルスを契機に世界的にその課題が深刻化した教育における公正に焦点を当て、ICTを活用した公正で質の高い教育の実現に向けた展望と課題について議論を行うことを目的とした。

本報告書は、その企画趣旨と講演録、示唆・アンケート結果の分析の三章からなる。第2章は、外国語でなされた海外の講演については日本語、日本語でなされた講演については英語の訳をつけている。なお、第1章の趣旨と第3章の示唆・結果分析の箇所については、文部科学省・国立教育政策研究所の組織的な見解を示すものではなく、執筆を担当した研究者の学術上の見解であることに留意されたい。また、登壇者の発表スライドについては、本報告書アップロード時のファイルサイズを小さくすることを優先し、画像の解像度を下げたため、既に公開されているシンポジウムのWebページとリンクすることで、スライドの内容を確認できるようにした。あわせて、御参照いただきたい。

【研究期間：令和元～4年度、研究代表者：藤原文雄（初等中等教育研究部長）】

2. 各章の要旨

第1章では、プログラムの概要と、これまでのシンポジウムで扱った論点と本シンポジウムのテーマ設定の経緯を紹介した。すなわち、これまで論点整理班が高度情報技術などICTの教育利用を巡って同定してきた重要な論点である「学びの質」と、促進条件班が注力してきた「公正」という鍵概念を融合して「ICTを活用した公正で質の高い教育の実現」というテーマを設定した。具体的には、そのテーマの下で、(1)「公正で質の高い教育」は何か、(2)「公正で質の高い教育」の実現を支える、又は阻害するICTの教育活用の可能性と促進条件

は何か、(3)「ICTを活用した公正で質の高い教育」のビジョンとシステムはどのようなものか、という三つの問いに答えを出していくことを目指した。

第2章では、本研究所長の挨拶や研究代表者による趣旨説明の後、「第一部リサーチ」として、新型コロナウイルス感染症への対策として学校が臨時休業となった際の各国の学校現場の対応とそこで見えてきた課題を切り口に、ICTを活用した公正で質の高い教育の実現に向けた現状の整理と今後の課題を米国Economic Policy InstituteのEmma GARCÍAエコノミスト、英国National Foundation for EducationalのJulie NELSONシニアリサーチマネジャー、愛媛大学大学院露口健司教授が報告した。米英の研究事例は、教育の実現にはICTへのアクセスや教員の準備や関与が必須であること、経済的に不利な児童生徒はそのアクセスが不十分であるという困難があるだけでなく、保護者からの支援も得られ難い（例：コロナ禍でもエッセンシャルワーカーとして働かざるを得ない）という難しさを抱えており、それにより学習機会の格差が悪化したことを示唆した。日本の研究事例は促進条件班が行った研究の一部成果を紹介し、令和2年4-6月に行われたICTの活用状況調査（文部科学省）と同年11-12月に行った調査（国立教育政策研究所）の結果を照合することにより、ICTの積極活用の側面に限ると自治体レベルでは自治体の経済資本、PC等の配備、教育委員会の人材配置、学校レベルでは支援人材等の配置の重要性を指摘し、GIGAスクール構想は経済資本に由来する格差を是正する可能性があることを示唆した。最後に促進条件班の本研究所卯月総括研究官及び論点整理班白水総括研究官がコメントを行い、視野の拡張を図った。

「第二部デモンストレーション」として、東京大学飯窪真也特任助教の司会の下、本プロジェクトのデモンストレーションスクールとして連携協働している熊本市と広島県安芸太田町の取組を事例に、ICTを活用した公正で質の高い教育を促進しうる条件や工夫を検討した。そこから困難な環境の自治体・学校に求められるのは、予算や支援の優先的な割当てだけでなく、多様な子供たちが共に学び合う協働的な学びやそこに生まれるつながりであり、そこにICTを効果的に活用する方途を探る教員集団に対する支援はないかという視点を提示した。最後に、立命館大学柏木智子教授、及び京都大学大学院石井英真准教授がコメントを行い、事例の価値づけを図った。

「第三部ビジョナリートーク」では、東北大学大学院堀田龍也教授、立命館大学柏木智子教授、京都大学大学院石井英真准教授、トロント大学Marlene SCARDAMALIA教授が、本シンポジウムのテーマに関する展望を描く講演を行い、最後に本研究所次長の閉会挨拶で本研究所に設置される教育データサイエンスセンターにも言及し、シンポジウムを閉幕した。

第3章では、第2章の講演録の振り返り、アンケートの結果分析に加え、シンポジウム後にコミュニケーションツールで行った登壇者と参加者間の質疑応答も掲載した。以上を踏まえ、今後の論点として「公正で質の高い教育」のより精緻な定義、その促進条件と抑制条件のさらなる解明、「平等」や「個別最適な学び」といったより精緻化の求められる概念の整理を同定した。